

## 特別イベント「兵庫・神戸を生きた詩人を語る Vol.5」

演者：たかとう匡子

演題：竹中 郁、神戸という風土が生んだモダニズム詩人

場所：神戸文学館

日時：2018年1月20日（土）14時—15時半



「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」シリーズの、足立巻一、綾見謙、中村隆、君本昌久に続く五回目の講演である。

竹中郁は神戸に生れ住んで、モダンな風土を詩の糧に新しい詩の精神を呼び覚まし、近代的なモダニズムの詩を書いている。時代の風をうまく背負って生きた竹中のモダニズムに講演では焦点があてられていた。

モダニズムとは20世紀文学の一潮流であり、

都市生活を背景にし、既成の手法を否定した前衛的な文学運動である。まず、リアリズム、抒情との対比でモダニズムについて説明され、各々の詩の背景についても述べられた。特に関西のモダニズムについてその特徴を示された。また、抒情詩人とモダニズム詩人との違いを明らかにすることにより、モダニズムの位置づけをされた。モダニズムでも一味違う安西冬衛との比較論も展開され、竹中を育てた灘という地域で、日常性の分野、抒情詩の領域を深く自分の詩を溶かし込んでいる。

竹中の9冊の詩集を紹介し、戦後の昭和23年の第7詩集『動物磁気』から第8詩集『そのほか』までは20年間も空いていると指摘され、全詩集に関してもその経緯を述べられた。第1詩集から「庭」、「晩夏」などを取り上げ、特にこの二つの詩に関しては情景説明とともに、いかにモダニズ



ム的な詩であるかについて解説がなされた。また、『動物磁気』の連続した短詩を取り上げ朗読解説された。『そのほか』などではさらなるモダニズムの変貌があり、その軌跡も簡単に紹介されている

一方、兵庫高等学校などの校歌などを多く書いたことで広く知られ、その詩を検証された。最後に、同じタイトルの草野心平の詩を引用し両詩の特徴を述べ、講演を終えられた。約40名の聴衆は熱心に耳を傾けていた。

